

レビ記(Vayikra) 16:1~30 民数記(B'midbar) 29:7~11  
イザヤ(Yeshua 'yahu) 57:14~58:14 ヘブル人への手紙(Messianic Jews) 9:1~14

## YOM HAKIPPURIM

### 贖罪の日

はじめに、

この世にはこの世の暦があり、聖書には聖書の暦がある。聖書の暦によると、今年の10月3日の夕暮れから4日の夕暮れまでは、ヨム・テルアというラッパを吹鳴らす日である、聖書歴の第七の月、ティシュリの月一日である。そして、ティシュリの十日は、ヨム・キップルという贖罪の日である。

ユダヤの暦では、第七の月をティシュリというが、この言葉はタナクでは見つからない。タナクには、「エタニムの月」<sup>1</sup>と記され

Notes by Yehoshua Jo ている。「תִּשְׁרִי(ティシュリ)」というのは古代メソポタミア北部のアッカドの「*tašrītu*」という言葉に由来する、「初め」という意味を持っているのである。そして、この言葉はタルムドのなかには使われている<sup>2</sup>。

聖書に記されている、第七の月を表す「אֶתְנִים(ʾetanim)」というのは、「永久、強い」という意味がある「אֵיטָן(ʾeytan)」<sup>3</sup>から由来する。このようにティシュリとエタニムという名前が持つ意味を調べているうちに、何となく秋の例祭との関連性が伺えると感じられる。

このヨム・キップルには、唯一大祭司が至聖所に入ることが許されている日なのである。そして、一年間のイスラエルのすべての人々の罪を贖いたための儀式が行われる。レビ記16章には、ヨム・キップルのとき大祭司は行う儀式について教えられている。また、民数記29章には、諸々の例祭に捧げるささげものに関して教えられている内容の一部である。このような内容と共に、このヨム・キップルが持つ意味をいくつかのテーマを通して学ぶことにしたいと思うのである。

罪の赦し、

幕屋、または神殿のなかで常に行われることは、主なる神に献げ物をささげることによって礼拝の儀式が行われる。しかしながら、その他にも、主なる神の戒めを犯した人々、すなわち罪を犯した人々を赦すための献げ物がささげられる。つまり、ヨム・キップル(贖罪の日)以外でも罪の赦しのために、贖罪の献げ物がささげられたのである<sup>4</sup>。

しかしながら、ヨム・キップル(贖罪の日)が設けられているというのは、普段行われている贖罪の献げ物の儀式では十分ではないという意味にもなる。それは、至聖所の外側で行われる献げ物の儀式は、完全な罪の赦しとしては不十分であるということになる。言い換えると、至聖所のなかで行われる献げ物の儀式こそ、罪の赦しのためになるということである。これは何を意味するのか。幕屋、また神殿のどこにも神の臨在と関連する。しかし、至聖所は主なる神がご臨在されると約束された場所なのである。

元々、罪というのは何なのか。また、罪の赦しというのは、何を意味するのか。ヨハネは罪について次のように定義する。

**罪を犯す者は皆、法にも背くのです。罪とは、法に背くことです。第一ヨハネ3:4<共>**

ここで「法」というのは、主なる神の御教えである「トーラー」を意味するのである。すなわち、トーラーに背くことを罪と定義するのである。このような定義は、レビ記のなかで示していることと同様である。そうしたら、アダムとハワが罪を犯したというのは、トーラーを犯したということになるのか。私の意見としてそうであると思うのである。どうして、アダムとハワの時代にトーラーがあったのか。もちろん、シナイ山で授けられたトーラーはないが、その根本は同様である。つまり、トーラーのなかで一貫して教えていることは、主なる神の御言葉に聞き従うことである。そして、トーラーのなかでもっとも大事な戒めは、「シェマ(聞きなさい)」<sup>5</sup>なのである。主イエスも、トーラーのなかでもっとも大事な戒めとは、この「シェマ(聞きなさい)」であると教えられている<sup>6</sup>。主なる神の御言葉、その方が命じられたことに背くこと、それがトーラーのなかで定義する罪なのである。

罪は、主なる神との関係を断たせるのである。人々は、罪のゆえに主なる神との関係が断たされ、その方の臨在のなかに入ることが出来ない、またその方と交わりが出来ないのである。イザヤ59:1-2では罪の状態について次のように伝える。

**主の手が短くて救えないのではない。主の耳が鈍くて聞こえないのでもない。  
むしろお前たちの悪が／神とお前たちとの間を隔て／お前たちの罪が神の御顔を隠させ／お前たちに耳を傾けられるのを妨げているのだ。**

幕屋、また神殿のなかで行われる贖罪の献げ物のささげは、至聖所以外の場所で行われる罪のための儀式である。これは、主なる神のご臨在のなかで行われることではない。つまり、主なる神と出会っているなかで行われるのではない。そして、ヨム・キップルのテーマのひとつは、「顔と顔とを合わせて見る」ということなのである。これは、使徒パウロが第一コリント13章で話していることなのである。これは、まさに主イエスの再臨のときを期待している表現なのである。

つまり、ヨム・キップル(贖罪の日)に行われる儀式は、主なる神のご臨在のなかで、またその方との出会いのなかで行われるのである。その儀式が示すことは、罪の完全な赦しである主なる神との関係の回復なのである。罪のゆえに主なる神の御前に出られない状態であったのに、その方の約束のなかで行われる罪を贖う儀式は、その方との関係を回復するのである。もちろん、贖い儀式による赦しというより、罪を赦してくださると約束された主なる神によるものである。

大きなショファル、

ユダヤのラビたちによると、聖書的ショファルの関連は、主に三つあると言う。一つ目のショファルは「最初のショファル」といい、七週祭であるシャブオト(שבועות)と関連がある。二つ目のショファルは「最後のショファル」といい、ヨム・テルア(יום תרועה)、またはロシュ・ハシャナ(ראש השנה)と関連がある。さらに、三つ目のショファルは「大きなショファル」といい<sup>7</sup>、贖罪の日であるヨム・キップル(יום כפור)と関連がある。

シャブオトは、トーラーが与えられたときである。そして、ヨム・テルアは、主なる神が王として来られることを迎えるために、悔い改めを呼びかけることなのである。ヨム・キップルの大きなショファルは、贖いの完成を宣告する、すなわち完全な自由、回復を宣告することである<sup>8</sup>。この大きなショファルは、マタイ24:31にも記されている。

人の子は、大きなラッパの音を合図にその天使たちを遣わす。天使たちは、天の果てから果てまで、彼によって選ばれた人たちを四方から呼び集める。〈共〉

ラビたちはこれらのショファルは創世記22章の雄羊の角を意味すると言う。つまり、シャブオトのショファルは左側の角であり、ヨム・テルアのショファルは右側のショファルであると言う。興味深いことは、これらの理解において創世記22章とメシアとの関連である。ちなみに、シャブオトのショファルはトーラーが授けられたことを思い出せるが、これは約束の聖霊の降臨を意味する。また、ヨム・テルアのショファルは、メシアの再臨を意味するのである<sup>9</sup>。

ユダヤの伝統、

ラビたちは、ヨム・キップルを厳粛に過ごすための五つの禁止条項を教える。その禁止条項とは次のとおりである。

## ① 断食<sup>10</sup>

- ② 沐浴の禁止
- ③ 体にオイルを塗る行為禁止
- ④ 皮の衣類と靴を身につけない(昔の革製品は贅沢品と見なされている)
- ⑤ 性行為の禁止

②③④の場合は贅沢の禁止という意味として、また⑤はもっとも厳粛な日なので、禁じると理解出来る。

さらに、神殿がないまま長い間ヨム・キップルを守って来ているユダヤ人は、この日に特別な儀式である。この儀式とは、シナゴグのなかで行われる五つの儀式である。ここでその儀式を簡単に紹介することにする。

- ① *Kol Nidrei*～この儀式は、ヨム・キップルが始まる夕暮れのと看、祈り文を唱えながら罪の告白を行うことである。
- ② *Shaharit*～ヨム・キップルの朝行う儀式
- ③ *Musaf*～神殿のなかで行われるヨム・キップルに関連する聖書箇所を読み上げる
- ④ *Minhah*～午後の儀式で、このときレビ記18章とヨナ書を読む
- ⑤ *Neilah*～最後の儀式で、*Neilah*というのは「閉める、閉じる」という意味がある。<sup>11</sup>

ここでもっとも注目したいのは、*Neilah*の儀式である。これは、ヨム・キップルの意味をもっとも表している儀式であると思われる。ラビたちは、ヨム・テルアは主なる神の法廷が開かれると理解しているように、ヨム・キップルはその法廷で判決がくだされ、法廷は閉めると理解している。そして、最後にシヨファルが吹き鳴らし<sup>12</sup>、ヨム・キップルの儀式は終わるのである。

このような背景から思い浮かべることは、福音書のなかに記されている主イエスの例え話である。主イエスの例え話は、様々なトラーの背景を教えられていると考えられる。そのうち、マタイ22章の披露宴とマタイ25章の十人のおとめの例え話は、ヨム・キップルと関連があるように考えられる。

イエスは、また、たとえを用いて語られた。「天の国は、ある王が王子のために婚宴を催したのに似ている。王は家来たちを送り、婚宴に招いておいた人々を呼ばせたが、来ようとしなかった。そこでまた、次のように言って、別の家来たちを使いに出した。『招いておいた人々にこう言いなさい。「食事の用意が整いました。牛や肥えた家畜を屠って、すっかり用意ができています。さあ、婚宴においでください。』」しかし、人々はそれを無視し、一人は畑に、一人は商売に出かけ、また、他の人々は王の家来たちを捕まえて乱暴し、殺してしまった。そこで、王は怒り、軍隊を送って、この人殺しどもを滅ぼし、その町を焼き払った。そして、家来たちに言った。『婚宴の用意はできているが、招いておいた人々

は、ふさわしくなかった。だから、町の大通りに出て、見かけた者はだれでも婚宴に連れて来なさい。』そこで、家来たちは通りに出て行き、見かけた人は善人も悪人も皆集めて来たので、婚宴は客でいっぱいになった。王が客を見ようと入って来ると、婚礼の礼服を着ていない者が一人いた。王は、『友よ、どうして礼服を着ないでここに入って来たのか』と言った。この者が黙っていると、王は側近の者たちに言った。『この男の手足を縛って、外の暗闇にほうり出せ。そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。』招かれる人は多いが、選ばれる人は少ない。」マタイ22:1～14<共>

「そこで、天の国は次のようにたとえられる。十人のおとめがそれぞれともし火を持って、花婿を迎えに出て行く。そのうちの五人は愚かで、五人は賢かった。愚かなおとめたちは、ともし火は持っていたが、油の用意をしていなかった。賢いおとめたちは、それぞれのともし火と一緒に、壺に油を入れて持っていた。ところが、花婿の来るのが遅れたので、皆眠気がさして眠り込んでしまった。真夜中に『花婿だ。迎えに出なさい』と叫ぶ声がした。そこで、おとめたちは皆起きて、それぞれのともし火を整えた。愚かなおとめたちは、賢いおとめたちに言った。『油を分けてください。わたしたちのともし火は消えそうです。』賢いおとめたちは答えた。『分けてあげるほどはありません。それより、店に行って、自分の分を買って来なさい。』愚かなおとめたちが買いに行っている間に、花婿が到着して、用意のできている五人は、花婿と一緒に婚宴の席に入り、戸が閉められた。その後で、ほかのおとめたちも来て、『御主人様、御主人様、開けてください』と言った。しかし主人は、『はっきりしておく。わたしはお前たちを知らない』と答えた。マタイ25:1～12<共>

ちなみに、ユダヤの伝統的理解のヨム・キップルの意味は、結婚式の意味を持っている。このような理解は、タナク全体のなかで主なる神とイスラエルの関係について、夫婦関係に描かれている。特にホセア書は、そのうち注目される預言書である。このような理解は、使徒の聖書のなかにも現れている。使徒パウロは、エペソにいる信者たちに、夫婦関係を教えながらメシアとエクレシアの関係を次のように語っている。

キリストに対する畏れをもって、互いに仕え合いなさい。妻たちよ、主に仕えるように、自分の夫に仕えなさい。キリストが教会の頭であり、自らその体の救い主であるように、夫は妻の頭だからです。また、教会がキリストに仕えるように、妻もすべての面で夫に仕えるべきです。夫たちよ、キリストが教会を愛し、教会のために御自分をお与えになったように、妻を愛しなさい。キリストがそうなたったのは、言葉を伴う水の洗いによって、教会を清めて聖なるものとし、しみやしわやそのたぐいのものは何一つない、聖なる、汚れのない、栄光に輝く教会を御自分の前に立たせるためでした。エペソ5:21～27<共>

使徒ヨハネは、メシアの再臨について黙示録のなかで花婿である花婿と花嫁の表現を次のように語っている。<sup>13</sup>

わたしたちは喜び、大いに喜び、／神の栄光をたたえよう。小羊の婚礼の日が来て、／花嫁は用意を整えた。黙19:7<共>

結び、

なぜ、古代の賢人たちは、このヨム・キップルにヨナ書を読むように勧めたのか。ヨナ書の内容は、イスラエルの最大の敵であるニネベに行って主なる神のさばきを伝えるように命じられることに背いて、ヨナがタルシスへ逃げようとする内容から始まる。しかし、結局ヨナはニネベに行き、主なる神のさばきを伝え、それを聞いたニネベの人々が悔い改めることによって、ニネベは救われるという内容である。もちろん、この書が与える様々な解釈がある。また、ラビたちの立派な解釈もある。しかしながら、私はこのヨナ書が与えることは、すべての人々が主なる神に立ち返らせるためにイスラエルが選ばれているという意味として理解する。それは、創世記12章にアブラハムが選ばれた目的でもある。

...地上の氏族はすべて／あなたによって祝福に入る。創世記12:3<共>

また、エジプトから救い出された目的は、

あなたたちは、わたしにとって／祭司の王国、聖なる国民となる。...出19:6<共>

主なる神がイスラエルを選ばれたのも、イスラエルからメシアが来られたことも、創世記3章から始まった主なる神の回復の計画に基づくことである。

メシアは再び来られる。そして、すべての人々が主なる神に立ち返るように、今もその方の尊い血潮のなかで罪の世界から救われた一人一人のなかでお働いてくださるのである。主なる神の法廷の扉が閉まる前に、すべての人々が悔い改めて、主なる神に立ち返るように...

“霊”と花嫁とが言う。「来てください。」これを聞く者も言うがよい、「来てください」と。渴いている者は来るがよい。命の水が欲しい者は、価なしに飲むがよい。黙22:17<共>

...「然り、わたしはすぐに来る。」アーメン、主イエスよ、来てください。黙22:20<共>